

研究課題	がん患者の病いの経験によるライフ・プランニングの再構成
研究代表者	河田 純一 (人間学研究科 福祉・臨床心理学専攻)

1. 研究目的

本研究の目的は、がん罹患することによる自己アイデンティティの再構成の過程を、A. ギデنزの再帰的自己論 (Giddens 1990=1993; 1991=2005; 1992=2006) を手掛かりに、がん患者のライフ・プランニング (Life-planning) の再構成に注目することで明らかにすることである。

がんは、今や「国民病」と呼ばれるほど我々にとって身近な疾患である。がんは、現在わが国の死因第1位を占め、国民の2人に1人が生涯のうちに罹患するとされている。しかしその一方で、がんの5年生存率は平均して約6割に達し、徐々に慢性疾患化の傾向を強めている (国立がん研究センターがん情報サービス「がん登録・統計」)。このため、がんの診断や治療を受けた「その後」をどのように生きていくのかが社会的課題となっている (土屋・高橋 2015)。

がんに関する研究は、これまで主に医療の枠組みの中で研究されてきた。しかし、人々は社会生活の中でがんを経験する。したがって、がん罹患して以降、「どのような人生を歩み」、「社会生活を送る上でどのような困難を感じている」のか、そしてそのことによって「どのようなアイデンティティを構成していくのか」という「がん経験者」の病いの経験は、がん経験者の個人的経験と社会的背景との関係から明らかにする必要がある。

2. 研究方法

慢性疾患化したがん患者の場合、生活を送る上での様々な選択肢に、それぞれのがんの種類や進行度、治療方法によって、より個別具体的な対応を迫られることになる。特に若いがん患者の場合、がん罹患する以前以上に、①就労、②恋愛・結婚・出産、③就学といった運命決定的なとき (Giddens 1991=2005: 128) が自己アイデンティティの再構成にとって重要な意味をもつことが考えられる。そこで、就労や恋愛・結婚、就学という事象がライフ・プランニングにおいて主題化される AYA (Adolescents and Young Adults : AYA) 世代の若いがん経験者に注目し、がんになって以降の人生とアイデンティティの変容を明らかにする。

そのための理論的枠組みとしては、現代社会の再帰性の高まりに注目する A. ギデنزの再帰的自己論を手掛かりとする。ギデنزが指摘するように、再帰性の増大した現代社会においては、「自己」のあり方を支持してくれる伝統のような安定した外的基準はない (Giddens 1991=2005: 5-6)。私たちはそうしたなかで、人生における様々な選択肢に個人として対峙していかなければならない。ギデنزの再帰的自己論から観れば、自己アイデンティティは、過去の経験を振り返るだけではなく、これからどのように生きていくのかといった将来のライフ・プランニングをもとに再帰的に再構成されていく (Giddens 1991=2005)。

そこで本研究では、AYA 世代のがん経験者のライフ・プランニングの再編成をうながし自己アイデンティティを再構成させる大きな要因となり得る、①「就労」、②「恋愛・結婚」、③「就学」

に焦点を当てる。こうした「個人がその存在の岐路に立つとき、あるいは運命を決定するような重要性のある情報を知るような」「運命決定的なとき (fateful moments)」(Giddens 1991=2005: 128) が自己アイデンティティの再構成にとって重要な意味をもつことが考えられる。こ平成 29 年度は、このうち主に、①「就労」に関する調査・研究を行った。

そのために本研究では、質的調査（インタビュー・参与観察・ドキュメント分析）をもとに、がん経験を自己物語の視座を用いて分析を行った。平成 29 年度も、患者会等でのフィールドワークや個別のインタビュー調査を下記の日程で実施した。

○インタビュー調査

2017 年 5 月から 11 月にかけて、がん罹患時に就労していた首都圏在住の計 3 名にインタビュー調査を実施した（表 1. 参照）。

表 1. 調査協力者一覧

	性別	がん発症時の年齢 (調査時の年齢)	がんの原発巣	主な治療法	職業
Aさん	男性	41歳 (43歳)	舌癌	右半側舌半側切除(皮弁移植) リンパ節郭清 化学療法・放射線治療	プラントエンジニア
Bさん	女性	28歳 (35歳)	子宮体癌	摘出手術(子宮、卵巣、リンパ節) 化学療法	介護職
Cさん	男性	35歳 (46歳)	精巣腫瘍	摘出手術(精巣(片側)、リンパ節) 化学療法	鉄道会社職員

3 名の調査協力者は、下記フィールドワークにおいて募集した。募集に応じた協力者には、後日メールで調査協力依頼書と研究倫理遵守の誓約書を送付し、調査への協力の可否を尋ねた。インタビューを開始する前に改めて口頭と書面で調査の趣旨とデータ・個人情報の取り扱いについて説明し、いつでも調査の協力を 辞退できる旨を伝えた。そして、それぞれ 90 分から 120 分程度のインタビュー調査を行った。インタビューは半構造化面接法を用いて、「がん罹患時の状況と治療の経過」「治療中の職場とのかかわり方」「がん罹患後に就労を継続するためにどのような配慮が必要になったか」「がんに対する考え方」などについて尋ねた。その内容は IC レコーダーで録音し、逐語録に起こした。逐語録のデータは匿名処理を行っており、その上で希望した調査協力者にはその内容を確認してもらっている。

なおこの調査は、大正大学研究倫理委員会による「人を対象とする研究に関する倫理審査」の承認を得て実施している（第 17-004 号）。

○フィールドワーク

2017 年度は、主に下記のがん患者支援団体・患者会が主催する交流会やイベント、勉強会に参加し、①本研究におけるインタビュー調査の協力者を募集、②交流会における参与観察を行った。

- 1) 若手がんサバイバー交流会
- 2) NPO 法人がんノート
- 3) NPO 法人支えあう会 α
- 4) 若年性がん患者団体 STAND UP！！

なお、申請者（河田）は、がん経験の当事者（2004～）であり、現在、慢性骨髄性白血病のセルフヘルプ・グループである「慢性骨髄性白血病患者・家族の会いずみの会」の運営幹事を務めている（2013～）。このような経歴から、申請者は複数のセルフヘルプ・グループやがん患者の支援機関等との信頼関係を構築している。調査・研究を進める上で、こうした「当事者性」には常に留意する必要がある。しかし、本研究は決して当事者研究を指向するものではない。

3. 研究成果と公表

平成 29 年度は、がん経験者の①「就労」の問題に取り組んだ。そしてその成果をまず、2017 年 6 月 21 日に大正大学で行われた「平成 29 年度大正大学学内学術研究発表会」で報告し（報告[1]）、報告を基に論文としてまとめ『大正大学大学院研究論集』42 号に投稿し、掲載された（論文[1]）。論文[1]、報告[1]では、分析に用いる再帰的自己論の理論的枠組みを提示した上で、がん患者の就労支援を目的としたマニュアル本を言説分析の対象とした。その結果、がん経験者が職場で働けなからよりがんという病いの経験の個別具体性が顕在化し、個々の「がん患者」としてのアイデンティティを再構成することを明らかにした。

次に、2017 年 11 月 5 日に東京大学で行われた日本社会学会の学術大会である「第 90 回日本社会学会大会」において、フィールドワークとインタビュー調査で収集したデータをもとに報告を行った（報告[2]）。報告[2]では、インタビューデータをもとにがん患者個々人の語りに注目することで、がん患者の就労という事象を、自己アイデンティティの再構成の視点から明らかにすることを目的とした。そのうえで注目したのが、第 1 に「がん経験の個別性」、第 2 に「制度およびメディアと自己アイデンティティの再帰的關係」である。

さらに、インタビュー調査を行った女性の生活史を分析の対象とした論文を、日本保健医療社会学会の機関誌『日本保健医療社会学論集』に投稿した（論文[2]：現在査読中）。論文[2]では、ある 1 人の女性の生活史を分析の対象とした。その結果、彼女の生活史は、「がんになる以前／以降」で断絶したものとして経験されていた。しかし、ライフ・プランニングを再帰的に再構成するなかで、自己アイデンティティの一貫性が担保されていることが明らかとなった。その鍵は、彼女の場合、がんになって以降も仕事を続けていくというライフプランニング上の道標と、仕事の中で培ってきた他者からの信頼だった。

(1) 学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文、著書

- [1] 河田純一 2017「「がん患者」になる、「がん患者」として生きる——再帰的自己論を用いた「がん患者」の自己アイデンティティの考察——」『大正大学大学院研究論集』,(42) . 〈査読有〉

- [2] 河田純一 2018「がん経験の中で再構成される生活史と自己アイデンティティ——ライフプランニングにおける就労に注目して——」『医療社会学論集』〈査読中〉

(2) 国内学会・シンポジウム等における発表

- [1] 河田純一「「がん患者」になるということ——がんという病いの二重の再帰性」『平成 29 年度大正大学学内学術研究発表会』, 東京, 2017 年 6 月 21 日. 〈口頭発表〉
- [2] 河田純一「がん患者の自己アイデンティティの再帰的構成 ——がん患者の就労に関するインタビュー調査から——」『第 90 回日本社会学会大会』, 東京, 2017 年 11 月 5 日. 〈口頭発表〉

参考文献

- Bury, M., 1982, “Chronic illness as biographical disruption”, *Sociology of health & illness*, 4(2), 167-182.
- Giddens, Anthony, 1990, *The consequences of modernity*. Stanford University Press. (=1993 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か? ——モダニティの帰結』而立書房)
- 1991 *Modernity and Self-identity: self and society in the late modern age*, Stanford University Press. (=2005 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)
- 1992 *The Transformation of Intimacy*, Cambridge Polity. (=1995 松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容——近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房.)
- 国立がん研究センター 2017「がん情報サービス『がん登録・統計』」, 国立がん研究センターがん対策情報センターがん情報サービス (2018 年 4 月 25 日取得, http://ganjoho.jp/reg_stat/index.html)
- 土屋雅子・高橋都 2015「がんサバイバーシップ研究の目的と実際」『血液内科』71(1), 169-174.